

仲間づくり教養コース ②国際社会学

大転換期を迎えた21世紀の世界を読み解く

第4回 ロシアの歌は、どのように日本へ伝わったか

みんなで歌おうロシア民謡を

日時 11月19日(土) 10:00am~

場所 鶴瀬公民館 第三集会室

講師 坂本 博 氏 (法政大学大原社会問題研究所研究員)

大貫 佐知子 氏 (セレモニープレーヤー)

第4回は、趣向を変え「ロシアの歌は、どのように日本へ伝わったか」について学習しました。後半は、代表的なロシア民謡を、受講者全員で歌いました。今回の受講生は、生憎の雨のせいか29名と前回よりかなり少なめでしたが、皆さん大きな声で歌い大いに盛り上がりました。講師の先生は、富士見市民大学初登場の、坂本博氏と大貫佐知子氏のご両人です。坂本先生は、一橋大学社会学研究科博士課程を卒業され、富山国際大学教授等を歴任されました。現職は、法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員。また国立市を中心に、「マトリョーシカの会」を主宰。ミニ・コンサートを定期的に開催するなど、他方面に亘りご活躍されています。セレモニープレーヤー大貫佐知子先生は、アコーディオンとピアノの名手。大貫先生は美声をご披露しながら、アコーディオンで受講生をリードし楽しい講座となりました。

ロシアの歌は、どのように日本へ伝わったか

I. 江戸時代の漂流民

1) 「ソフィアの歌」(桂川甫周編『北槎聞略』)

ネレヂンスキイ - メレツキイ作詞 (1791年)

Ох! Тошно мне

おお、私はやるせない

На чужой стороне...

見知らぬ地で

Всё постыло,

すべてが嫌で

Всё уныло:

すべてが気を滅入らせる

Друга милого нет.

愛しい人はいない

Милого нет,

愛しい人はいない

Не глядела б на свет.

世間の人たちは見たくない

Что бывало,

過去のこと

Утешало,

慰めになること

О том плачу теперь.

それを偲んで今は泣いている

В ближнем леску
Лишь питаю тоску:
Все кусточки
Там о милом твердят.
Будто со мной
Там сидит милый мой,
Забываюсь,
Откликаюсь
Часто на голос свой.

近くの森では
憂いを抱くだけ
すべての木々が
そこでは愛しい人のことを繰り返し話す
あたかも私と
そこでは私の愛しい人がいるようで
意識が遠のく
私は答える
しばしば自分の声に

Милого нет!
Ах, пойду за ним вслед:
Где б ни скрылся,
Ни таился,
Сердце скажет мне путь.

愛しい人はいない
ああ、彼の後を追って行くわ
どこに隠れていようと
潜んでいようと
心が私に道を教えてくれるでしょう

Ох! Тошно мне
На чужой стороне!
Слёзы льются,
Не уймутся;
В них отрада моя.

おお、私はやるせない
見知らぬ地で
涙が流れる
留まることがない
そこに私の慰みがある

2) 「目黒髪黒の歌」(『光太夫談話』)

Чёрные глаза
Чёрные брови
Чёрные волосы
Венчай, на...
Ох, венчай, на...

黒い目
黒い眉
黒い髪
結婚して
おお、結婚して

3) 「ヲロシヤ国歌」(『魯齊亜国漂流聞書』)

Хожу я по улице, да не нахожуся;
Гляжу я на милова, да не наглядуся.

То-то люли, то-то-люли, то-то-люшинки мои

Свети, светел месяц, высоко, не низко,
Не далеко, близко, во все чисто поле!

То-то люли и проч.

Как там в чистом поле девка просу полет,
Девка просу полет, белы руки колет.
Жаль красной девицы: снял бы рукавицы,
Снял бы рукавицы, подарил девице,
Чтоб просу полола, а рук не колола.

私は通りを歩くが、歩き足りなくはない
私は恋人を眺めるが、眺め足りなくはない
(合いの手)

輝け、明るい月よ、高く、低くではなく
遠くではなく、近くで、広い野原一帯に
(合いの手)

向こうの広い野原で娘が黍畑の草取りをしている
娘は草取りをして白い手がチクチクする
美しい娘が可哀そう、手袋を脱いで
手袋を脱いで娘にあげたい
黍畑の草取りをして手がチクチクしないように

Красна девка хороша; взял бы,взял бы за себя...美しい娘はお気に入り、嫁に、嫁にもraitたい
 Пошлю я к ней свата за себя посватать... 私は結婚するために仲人を彼女のところに遣やろう
 Поп-то не венчает: за сыночка чаает; 司祭は結婚させない、息子の嫁にしたがる
 Да и дьякон говорит, что за сына ж норовит; 輔祭も息子の嫁にと言う
 Дьячок тож не служит: по девушке тужит; 堂務者も勤めをしない、娘を惜しんでいる
 Пономарь горюет: сам девушку любит. 寺男は悲しむ、自分が娘に惚れている
 Поедемте, братцы, в лесок за охотой, 行こう、諸君、森へ狩に
 Наловимте, братцы, зверьков разных много: 捕えよう、諸君、色々な獣を沢山
 Попу-то куницу, дьякону лисицу, 司祭にはテンを、輔祭には狐を
 А дьячку бедняку, белу горностаю, 哀れな堂務者には白いオコジョを
 Пономарю горюну, хоть серова зайку, 悲しい寺男には灰色のウサギでも
 Просвирне горюше, хоть заячьи уши. 不運な聖パン焼き女にはせめてウサギの耳を
 Чтоб они мне не мешали, с девкой обвечали! やつらが私の邪魔をせずに娘と結婚させるように
 То-то люли, то-то-люли, то-то-люшинки мои (合いの手)

〈1810年の歌集〉

4) 「ゴロス」(古賀謹一郎編『蕃談』、遠藤高環編『時規物語』)

Говорила я милому, сердечному своему: 私は自分の心から愛する人に言った
 «Если я тебе по нраву, сошли в свою сторону. 「私があんたの気に入るなら、自分の故郷に遣って
 Если я тебе не по нраву, возьми в руки пистолет, 気に入らないなら、ピストルを手にとって
 Прострели ты в грудь мою и в чистом поле схорони.私の胸を撃って広い野原に葬って
 И подпиши ты янтарём, что люблю я тебя». そして、松脂で、私があんたを愛していたと書いて

II 明治・大正

- 1) 旗野^{とりひ}十一郎作詞「雁の叫び」(「ヴォルガの舟歌」、1903年)
- 2) 小山内薫訳詞「どん底の歌」(1910年)
- 3) 昇曙夢訳「ろしあ民謡集」(1920年):「冬のヴォルガを」(「トロイカ」)、「流浪の人」(バイカル湖のほとり)

III 昭和一終戦まで

- 1) ドンコサック合唱団来日 (1931年)
- 2) フォードル・シャリヤーピン来日 (1936年) → 與田準一訳詞「ステンカ・ラージン」
- 3) 緒園^{りょうし}涼子作詞「夜の窓辺に」(「赤いサラファン」)、「渚に歌ふ」(「バイカル湖のほとり」?)
- 4) 東海林太郎歌「ステンカ・ラージン」(妹尾幸陽訳詞、1939年)

IV 戦後のうたごえ運動

- 1) 「沿海州楽劇団」: 井上頼豊、北川剛、黒柳守綱
- 2) 楽団カチューシャ
- 3) うたごえ運動: 関鑑子

V 今日歌う曲

- 1) 帝政時代

「黒い瞳の」、「赤いサラファン」、「黒い瞳」、「カリンカ」、「バイカル湖のほとり」、「小さなグミの木」、「ステンカ・ラージン」、「トロイカ」

2) ソ連時代

「カチューシャ」、「ともしび」、「泉のほとり」、「ウラルのグミの木」、「モスクワ郊外の夕べ」

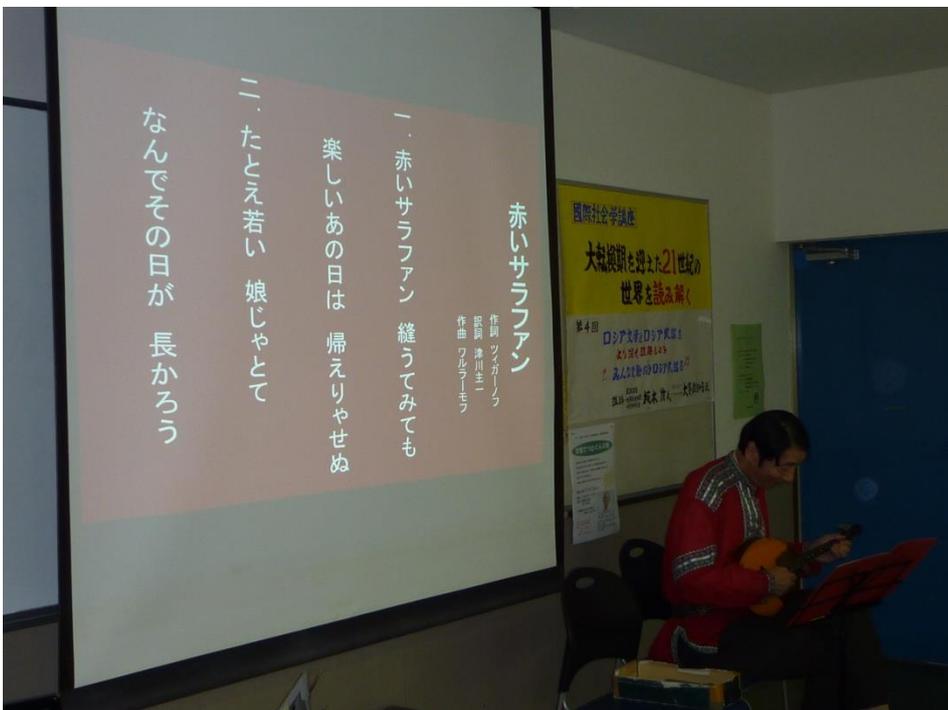
後半は、みんなでロシア民謡を歌いました

○坂本先生には、ロシアの民族衣装を纏い、楽しい雰囲気を醸し出して頂きました。

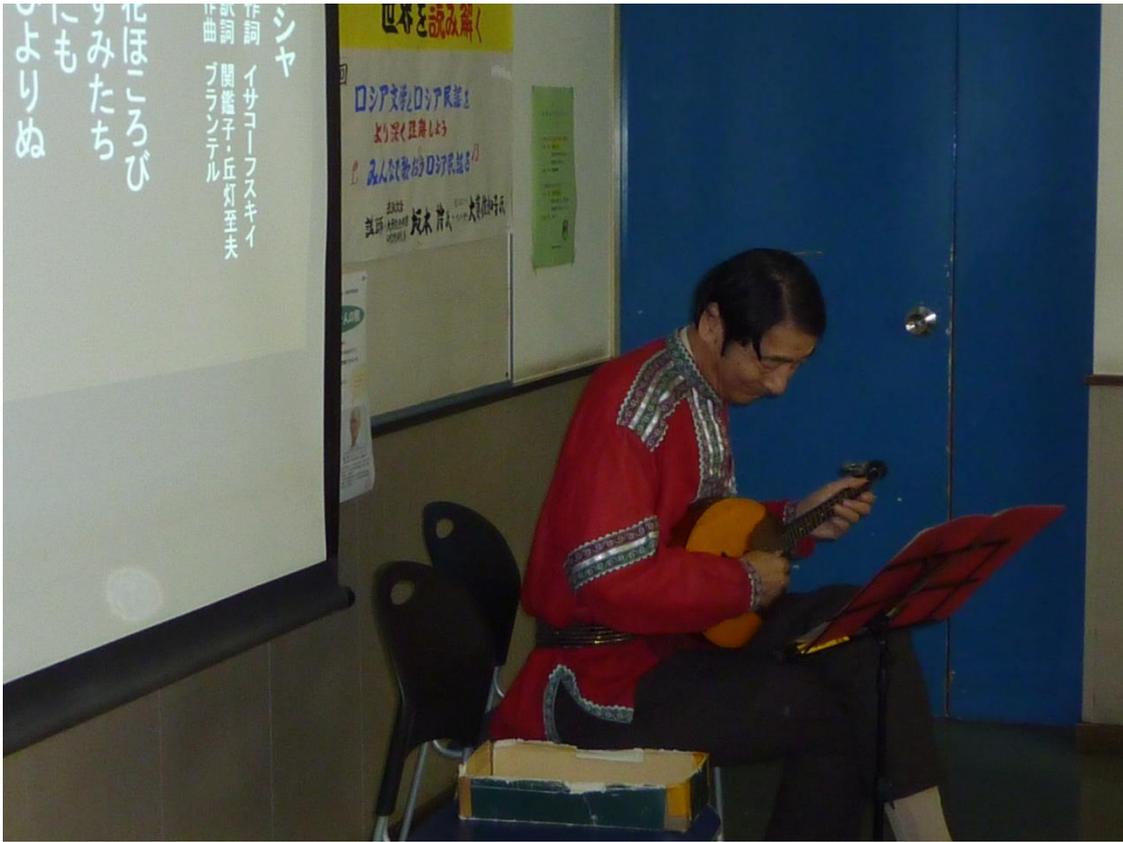
○歌った曲目は、ロシア帝政時代の曲を8曲、そしてソ連時代の曲を5曲。

○大貫先生のアコーディオンの伴奏にリズムに乗り、予定時間を15分もオーバーして、全員で熱唱しました。









【文責：秋山孝昭】